

『文芸民族』という場所(1)

1940年に香川で創刊された同人誌を知る

阿部安成

Yasunari Abe

滋賀大学 経済学部 / 教授

希少冊子

「文芸民族」を誌名とする逐次刊行物がある。わたしがいくつかのデータベースで調べたかぎりでは、これはいまのところ、日本近代文学館(東京都目黒区駒場)に2号分が所蔵されているだけの希少な文献で、その発行期間もよくわかっていない。この刊行物を知ったきっかけは、わたしが調査と研究のフィールドとしている国立療養所大島青松園で20世紀中葉の戦時期に手書き手づくりで回し読みされていた「青松」という名の「廻覧雑誌」があり、そこに掲載された記事から「文芸民族」という名の逐次刊行物があったことを知ったのだった¹⁾。

日本近代文学館のデータベースで検索したところ、2号分がヒットした。それらは、1940年2月10日発行の第1巻第1号と、1940年11月15日発行の第1巻第4号となる(どちらも活版印刷)。おそらく初めて、本稿によってこの文献が紹介されることとなるだろう。

春の号

1940年2月に創刊された『文芸民族』には「春の号」との号表記がみえる。創刊号の表表紙おもてのどにちかいところに、「季刊」と記されており、年に4回の発行があったとおもわれる。この号をみてゆこう。

表表紙は縦3つ横2つの6つの柵に区切られていて、そのうちのうえの4つに大きく、文、芸、民、族の4文字が明朝体で配置されている。構成主義といってよい趣向か。巻号表記は右から左への横書きで、「第一巻 創刊・春の号 第一号」とあり、そのしたに、やはり右から左への横書きで、「文芸民族社発行」とみえる。

¹⁾ 阿部安成「手づくりで偲ぶ—国立療養所大島青松園関係史料の保存と公開と活用にむけて」(滋賀大学経済学部 Working Paper Series No. 250、2016年4月)を参照。この『青松』については2016年にリプリント版を刊行予定。

さきに奥付をみると、「(季刊) / 文芸民族 / 第一巻 第一号 / 創刊春の号 / 皇紀二千六百年記念創刊」と、まず第1段に横書きで記され、つぎの第2段には追い込みの縦書きで、「季刊・文芸民族第一巻第一号・昭和十五年二月八日印刷納本・昭和十五年二月廿三日発行・編輯兼発行者香川県仲多度郡神野村一八三番戸堀家義勝・印刷者高松市松島町市原福馬・印刷所高松市松島町高松刑務所 / 編輯並発行所香川県仲多度郡神野村一八三」と記されている。第3段には、「本誌定価 / 一部三十五銭(郵税六銭)一ヶ年前納一円三十銭(郵税共) 特輯増大のときは定価変更郵便券代用一割増」 / 文芸民族社」とある。

発行所として記された香川県^{なかつた とうぐんかんの}仲多度郡神野村は、その後、同郡^{まんのうちょう}満濃町の大字となった。2006年に満濃町、琴南町、仲南町が合併してまんのう町となり、その後、神野から大字の表示がなくなった。

奥付のあるページのつぎには、見開き2ページにわたって、「奉頌・皇紀二千六百年 / 文芸民族社(五十音順) / 同人」の名が列挙されている——垂里江光、井上久子、川北劉一郎、久保井信夫、櫛橋芳子、琴陵光重、小松潤、志邨節、菅道雄、塩田一樹、都村清敏、苗村治一、内藤登、長尾榊夫、真野拓、碧優美子、「客員」として荒木暢夫、木村毅、中河与一、和田邦坊の名がみえる。この同人一覧のところでページノンブルが208、209となる。200ページあまりの逐次刊行物が創刊された。

目次

ついで目次——口絵は「金刀比羅宮神苑待宵山」が和田邦坊、扉絵の「横道洞子」が甲斐己三郎、巻頭に新明正道「イデオロギーの頽廢」、久保井

信夫「虐げられしセンチメンタリズム」、新田潤「小説の貧困」、「隨筆二章」として一戸務「教養の文学」、荒木暢夫「白描の作者を悼む」、「句と歌と詩」として、深川正一郎「楳・俳句」、内田暮情「録音・俳句」、苗村治一「帰郷・短歌」、琴陵光重「赤き靴・短歌」、長尾榊夫「季と觀照・短歌」、小松潤「満洲風物詩・短歌」、志邨節「朱印(他一章)・短詩」、妻木衆「燠火に・短詩」、加藤一「夏海・短詩」、そして、中川与一「万葉集と瀬戸内海」と木村毅「破片を拾ひて」の2編が細い罫線で囲まれている。

「映画時評」として、井上久子「ブルフ劇場その他」と妻木衆「写実に於ける相對性理念」、「俳句四人衆」として、佐々木有風「星祭」、鈴木善助「菊」、佐野まもる「冬日」、坂井道子「日蝕」があり、つづけて、琴陵光重「祖先の聲」と志邨節「紅葉箋手記」が載る。「朱欒林」と題されたページには、都村清敏「応召」、阿部みどり「秋」、小亀紫峰「矛盾」、赤間学「隨想断片」、小野良夫「夕風」、小松潤「満洲通信」、水木耕「迷ひ」、菅道雄「寸信」、井上久子「スタイル」、藤島隆志「斑点」がある。

そして、志邨節「和田邦坊論(同人論其一)」、つぎに小野嘉明「郊外の丘(隨筆)」、苗村治一「裁く日(隨筆)」、さらに「創作」として塩田一樹「莫愁」、真野拓「自嘲記」、志邨節「不連続線(百八十枚)」があり、「輯後閑筆」には久保井、真野、志邨の名がある。

扉にはやはり、文、芸、民、族の明朝体4文字が縦2文字横2文字に配置され、「皇紀二千六百年記念創刊」と記され、さきの目次にあったとおり甲斐による絵がある(なんとも稚拙な絵にみえる)。

「白描」の作者を惜しむ

わたしが『文芸民族』に着目したきっかけは、1940年代の戦時下に国立療養所でつくられ「廻覧雑誌」として重宝されていた『青松』に、島外の逐次刊行物の誌名が記載されていたことにあった。その『青松』は1部かぎりの手づくりで、それ自体が島外に出まわることのない伝達手段だった。1940年代の大島では『青松』がつくられるまえに、療養所の総合誌というべき逐次刊行物『藻汐草』も編集、発行され、詳細は不明ながらも、島外へも発送されていた²⁾。そうしたときに、『文芸民族』という名の媒体と地元の療養所とにどういった関係があったのかを知りたいのである。

香川地域のこの同人誌に、荒木暢夫が「『白描』の作者を惜しむ」と題した稿を寄せていた(7ページ分全28段落)。

荒木の稿は、「明石海人氏が死んだ。到底永くはなからうといふことは耳にしてゐたが、意外にも早くその訃報を大朝の本紙版で知つて、また新に心を蓋せられるやうな暗い気持ちになつた」と始まる。稿の題目には作品名があつてその著者の名がなく、稿の本文は著者名から始まる。それで均衡がとれているともいえそうだが、荒木にとっては、『白描』という作品が主であつたとみえてしまう。そういう筆者荒木は、『白描』の著者の死を『大阪朝日新聞』の訃報で知つたというのだ。荒木は記す――

新万葉集への出詠からその名を知られ、歌集「白描」の著者として一躍有名になつた。北條民雄氏以来の癩文学といふあまり面白からぬ名称の範疇に入れられて、歌壇のみならず文壇その他からの批評は兎に角同情ある褒賞礼讃の声が多かつたやうである

というとき、著述者として当然ではあろうが、まずその作品があつて明石はその名が知られるようになったと説かれている。その作品は「北條民雄氏以来の癩文学といふあまり面白からぬ名称の範疇に入れられて」というときの「あまり面白からぬ」とはなにをあらわしていようか。明石の作品には多方面から、「同情ある褒賞礼讃の声が多かつたやうである」とのことだ。

明石の逝去は1939年6月9日だった。それから8か月あまりのちに、明石とはとくに縁があるのではない地で発行された逐次刊行物でも、その死が惜しまれたのだった。

ところで、朝日新聞記事データベース聞蔵Ⅱビジュアルで検索したところ(2016年3月12日)、明石海人の訃報は『東京朝日新聞』1939年6月13日朝刊第11面に掲載されていた――「明石海人氏【岡山電話】光と希望を失つた業病苦の中から生れた宿命の短歌詩人“白描”の作者明石海人氏は岡山県立長島愛生園で養生中九日夜十時四十分死去した」と報じられた。

この荒木の稿については、またあとで論じるとしよう。この論述が本稿の核となる。

あとがき

「輯後閑筆」をみるまえに、そのうえにおかれた予告を確かめておこう。文芸民族社の名で、「次号編輯委員会期日／来る三月下旬於琴平／町四九久保井信夫宅」と告げている。その右には、「次号／夏の号原稿締切」が知らされる。「同人作品」は「来る三月二十日厳守」、「一般投稿者作品」はそれよりも5日はやい15日厳守となっている。第2号をつづけて発行するという確かな意欲がうかがえる。

2) 『藻汐草』(活版印刷)の現存号すべてがリプリント版として刊行されている(阿部安成監修、解説『藻汐草』リプリント国立療養所大島青松園史料シリーズ2、近現代資料刊行会、2014年)。

久保井

次号の編集委員会を開く場所に指定された家の主である久保井信夫の名による「輯後閑筆」がある。「新雑誌刊行のくはだては既に昨年の春頃から若いわたしたちを虜にしたものだつた。其の後高松から、「南方文芸」の創刊を見、勧誘せられて一時は合流したこともあつた。また当地の「ことひら」誌からも親切に呼び懸けて下さつて、特にわたしたちの為に頁の大部分を割いていたゞけるやうなお話があり、大いに感謝したことであつた」と、創刊にいたる経緯がたどられている³⁾。戦時下の1930年代末あたりで香川には、いくつかの逐次刊行物があり、それらとかかわりあいながらこの『文芸民族』が創刊されたということなのだろう。

久保井はいう——

芸術は畢竟するに個のものであり少くとも求心的に依るべくして依つた個の結集の握手の下に、其精神とするところのものを開花せしめ、新運動の波濤を激しく騰げねばならないものである。「文芸民族」発刊の意義は他になかつたのである。真実と情熱、大胆と素朴性、若さと気魄、このことは調和ある強靱な結集力を俟つて始めて、今茲に輝かしい本流に乗ることが出来たのである。／狭い流れではあるが、わたくし等は真摯になつて清冽なる水脈を探つてゆくであらう。

——久保井はまた、「この創刊号の編輯は主として志邨氏を煩はした」と明かし、「春光うららかに皇紀二千六百年を迎ふ。この雑誌は祖国の山河に捧げるわたしたちの心からなる慶祝の花束である」との賀辞をのべた。

3) この『南方文芸』と『ことひら』は香川県立図書館の香川県内公共図書館横断検索、香川大学図書館webOPAC、国立国会図書館NDL-OPAC、日本近代文学館図書・雑誌検索で検索したところ、ヒットなしだった(2016年3月8日検索)。

真野

つぎに真野拓による稿がある——「此の頃頻りに思ふことは「気魄の貧困」である。誰を見ても浮かぬ顔をしてゐる。〔中略——引用者による。以下同〕生活に追廻されてしどろもどろの醜態で生きてゐるのが所謂近代人だから情なくなつてしまふ。さういふ自分も其の一人だが……。さて其処で「溺れる者は何んとやら」の諺に背かず手当り次第にすがつて見るが、思想も宗教もお前ばかりは御免とよせつけぬ。もう他力はこりこりと見限りをつけて、持つて生れた拗者の本性を其の儘に腹の底までさらけ出して書いて見たくなつた。——とさういふ人間は居ないものかなあ」とのこと。そこで、

創刊号は何かの調子で創作が少なかつたが、次号は一つ馬力をかけて書いて貰ひたい。同志の集つた席上で次は小説特輯号にしようぢやないかといふ話が出たが全く賛成だ。

とつぎへの期待をあらわした。

志邨

もうひとりの寄稿者が志邨節、彼は7つの一つ書きを綴つた。まずは発行遅延について——「一、発行が多少遅れさうだ。年頭でもあつて、印刷の方にも多分の日が必要であり、用紙の如きも易々と配給されない現状なので決して編輯委員の怠慢ではない。この事は既に極度に制限されてゐる物資を多量に使用する以上一応は必ず当面しなければならない苦慮である」と、困難な時局であることを誌面に滲ませている。「一、本輯は何分にも大切な創刊号でもあるので編輯も豪華に、且つ大冊のものにしようとしたが、約束されてゐた小松潤の創作の長篇をはじめ、其の他有力な二三の原稿も届かない。ゆつくりと編輯して、今この後記を書いてゐるのが一月十五日。きのふ委員諸君と最

後の協議を了へて、編輯のことは全く終了したのである」と企画と結果と経緯を記録した。

この創刊は1940年、紀元2600年を記念したという——「一、皇紀二千六百年記念の創刊として、本誌はここに発足した。従来幾たびとなく雑誌を創刊した時の経験に比べて、このたびのは今までとは多少異つた或る種の熱意をもつてやりかかつた仕事の一つである」と語るその一方で、「必要の場合は何時でも廃刊していいのだし、又永久に続けていつてもいいのである。私達はさう固苦しくは考へてゐない。また、本誌に対する世間の口さがない批評のこゑもあらうとおもふが、大いに言つてくれていいのだし、正当な理論であればあなたが黙殺も必要としない」という。どういふ「批評」が予想されたのだろうか。それはここからはわからない。

ついで執筆した同人や客員の紹介となる——「一、本輯はその内容に於いても巻頭評論として評論家新野正道、同人久保井信夫、並に作家新田潤諸氏の文芸時評。随筆の荒木暢夫氏は北原白秋最高門下、一戸務氏は法大教授、同人小野嘉明氏(筆名亜里江光)は明大教授、同人苗村治一氏は若き検事としての検証記を、殊にも客員中河与一、木村毅両氏の作品をはじめ、和田邦坊画伯の口絵、並にホトトギス同人深川正一郎氏の句、又創作陣も大方の異色あるものとなり、真野君の尽力で君の作「自嘲記」と共に塩田一樹君の作を得た。私のは二ヶ月余の病中何にも書けなかつたところから、「婦女界」の依頼で起稿中の長篇の一部を未推敲のまま流用することにした。同誌への作は新たに筆を起すつもりである」と、文芸民族社の陣容や執筆者のようすを伝えている⁴⁾。

そして創刊にむけての苦労はというと、「一、創刊号編輯上に於ける諸般のことは主として久保井

信夫氏が忙がしい公務の傍ら万事処理して下さつた。全く感謝しつただ私と真野君とが些細な編輯事務に与つたに過ぎない。苗村氏は主として対外的な交渉に當つてくれた。ただ編輯委員都村清敏君が本誌の創刊をみずして応召され創刊に至るまでの君の尽力をおもひつつ、はるかに武運長久を禱つてやまない」との内幕が明らかにされた。

つぎの一つ書き——「一、業病宣告、失明、全身麻痺といふ最苦難に遭遇しつ「私達は深海に棲む魚のやうに自らが燃えなければ何処にも光はない」と言つて死んだ明石海人、しかしさうした心事は即ちそのまま誰しもの境遇であつて、私たちは進みに進んで自ら白光体となり、努力精進しなければ私達の生命は輝いて来ない。自ら進んで燃えることだ。生命の光をかがやかすことだ。といふ風に興奮して、私は再三峻烈に諸方へ原稿を催促した。そのために多少感情を害された人もあつたやうであるが、しかしまたそれがためにおそろしい熱意をもつて優秀作を投じてくれた人々も多く、当時の私の興奮は今はずいぶん感激と變つてゐる」。ここには不用意に、必要以上に病者の作品を讃える姿勢はない。ただ、ではなぜ、この創刊号の誌面に明石をもちださなくてはならなかつたのか、それがわからない。

最後の一つ書きから——「社外一般投稿者の人々も決して誌幅などを心配されぬやうに、いゝ作品であればわれわれは誌面は幾らでも提供する。では次号へ、私達は限りない前進をつづけやうとする」との決意表明。

そのあとに、志邨によってさきに「対外的な交渉に當つてくれた」と紹介された苗村は、「病床の爲後記原稿未着」と「附記」された。

4) ここにみえる苗村が丸亀裁判所判事であるとのちの『文芸民族』第1巻第4号掲載「暦日」欄にみえる彼の大阪転任やほかの同人の召集解除帰還にさいして送迎会を開いたとの記事に記される。

規程

このあとがきのページにはまた、「文芸民族社清規」が載る。全9項目——

- 一、「文芸民族」は文芸同人雑誌として年四回発行の季刊とす
 - 一、本誌は同人相互の作品発表機関にして、また一般社外投稿作品に於ても優秀なるものは之を採用す
 - 一、右、一般社外投稿作品の拾捨は編輯委員之に當る
 - 一、本社諸般の企業に就いては随時同人会を開いて之を定む
 - 一、同人費は金參円とし、年四回作品投稿と同時に之を納む
 - 一、本誌の編輯は当分久保井信夫、苗村治一、真野拓、都村清敏、志邨節等の創設委員之に當る
 - 一、新たに同人としての加入申込者に対しては、前記編輯委員一同の共同推薦に俟つ
 - 一、本誌編輯所を当分香川県琴平町南郷見志邨節方に置き諸通信は当分同所宛のこと
 - 一、本誌発行期日／春の号 二月上旬発行／原稿締切12月20日／夏の号 五月上旬発行／原稿締切3月20日／秋の号 八月上旬発行／原稿締切6月20日／冬の号 十一月上旬発行／原稿締切9月20日
- 同人誌ではあるが、「一般社外投稿」もうけつけていたのだった。

冬の号

1940年11月15日発行号は、その表表紙に、「第一卷／冬の号／季刊／第四号」と右から左への横

書きで記されている。誌名題字の、文、芸、民、族、4文字の字体と配置は創刊号におなじ。

奥付には、「昭和十五年十一月十日印刷納本・昭和十五年十一月十五日発行・編輯兼発行者香川県仲多度郡神尾村百八十三番戸堀家義勝・印刷所香川県高松市松島町・高刑作業課・印刷者香川県高松市松島町在木武喜／発行所香川県琴平町南郷見志邨節方 文芸民族社」とみえる。

このうえの段には刊行予告——「季刊／文芸民族／第一卷 冬の号 第四号／本誌発行期日／春の号・2月上旬発行／夏の号・5月上旬発行／秋の号・8月上旬発行／冬の号・11月上旬発行」があり、いちばんしたの段には、「本誌定価／一部五十銭(郵税六銭)／一ヶ年前納 二円(郵税十銭)／郵券代用一割増／定価五十銭／香川県琴平町南郷見／文芸民族社」と価格が記されてある。

この号は創刊号とは、ページゾンプルの^{フォント}字体が異なっている。

目次

第1巻第4号の掲載稿を目次にみよう——和田邦坊「扉並口絵」、中河与一「永遠再興」、十返一「批評家と作家」、長田文夫「文学雑談」、ヘンリ・デイ・ソロウ原作／今井規清訳「田舎宿の亭主」、和田邦坊「一空庵句片」、「詩三章」として琴陵光重「海港詩篇」、小松潤「松花江」、柴俊介「冬寒日」、ついで、世紀の会琴平支部「世紀の会に就いて」、櫛田芳子「初秋通信(随筆)」、大崎澄谷「随想(随筆)」、「短歌」に長尾樹夫「比叡山」、河野聰琴庵「吉野懐古」、小宮山一夫「秋と病室」があり、つぎに、箸方赤鳥子「風鈴・句」、星川良夏「野菊咲く・句」、神谷天心「韃靼の春」、大倉映子「貧しき庭」、中河与一「風流隠士」、山川弘至「逸題」、

赤間学「続々・随想断片」、真紀葵雨「区切られた愛情」、田山一雄「豊満ダム」、真野拓「天人憂鬱」、堺美代子「春」、河村潤二郎「痴人愛陶の歌」、小松潤「北満 夏の風物詩」、北島董子「露の萩」、編輯委員「世紀の会賞設定に就いて」、編輯委員「朱欒林に就いて」、二〇篇二十氏「第一回世紀の会賞候補作品」、同人七氏「俎上座談」、そして「創作」として真野拓「上流」、水木千代「黄昏」、塩田宏「山鳥」、土谷勉「秋作」、志邨節「入門(一〇〇枚)」、そのあとに、編輯委員「輯後閑筆」、文芸民族社「作品をつのる」となる。

余白

和田邦坊の稿「一空庵句片」の末尾余白に、「新刊予告」が記されていた。

新刊予告歌集 白砂集 ☆／癩文学の結晶が短歌であると言っても差支へない。それ程短歌は癩者にとつてまことに血であり肉である。生活の過剰の成果と言ふには余りに傷々しい。彼等の淨らかな理念と悲しき宿命は如何なる芸術を形象つたか／癩院は門毎に注連を結び垂らしいのち寂びつゝ、ひそやかにあり 浅野繁／明け暮れをふるさと恋ひし心かも故郷に帰て癩院を恋ふ 綾井讓／熱とりの白き葉を呑みし夜は合飲の花散る夢を見にけり 小宮山和夫／——歌集「白砂集」より——／香川県木田郡庵治村／大島療養所発行とある。

この歌集は、たしかに刊行されていた。その書誌情報を記そう。編輯兼発行者野島泰治、発行所大島療養所患者慰藉会、印刷所間島印刷所(香川県高松市幸町)、大売捌、図書雑誌大取次、高松百貨店書籍部(香川県高松市丸亀町)、発行

1940年11月10日。この歌集『白砂集』の扉には、「第二歌集」「藻汐短歌会」の文字がみえる⁵⁾。これは、大島療養所で療養するものたちが集う会の名が発行所としてつき、園長の野島泰治によってまとめられた歌集だった。奥付に記された日付では、『白砂集』のほうが『文芸民族』第1巻第4号よりもさきに刊行されたこととなっている。

『文芸民族』はその誌上で療養所の刊行物を紹介し、そしてこの号には、大島療養所に生きるものの作品も掲載していた。それが小宮山和夫と土谷勉の稿である。土谷の稿はあとでみることにして、ここでは小宮山の短歌をあげよう。

小宮山和夫

目次では「一夫」と表記されていた小宮山の短歌がこの号に掲載されている。題は「秋と病室」——(ルビ、傍点は原文のまま)

ちかぢかと睫の陰影のかすけさよ口開けて塗ら
すグリセン液
雨しぶく夜迷ひ来しすいとなれきれぎれに啼くそ
の音澄みつつ
一湾は風ぎ色かはる陽の移りくり返すのみの風景に病む
熱退きし朝は恋ひみつ露ながち萩と薄とわれも
こうの花
秋はよし窓の月夜に思ほへばつばらにさびし松
は松の影
さみしさをかたみにもてば勞りて言ふこともなし
石露の花

——これら6首を寄せた小宮山がさきの歌集『白砂集』に詠んだ短歌は、「光りさそふもの／皇紀二千六百年。それは癩院に五年目の元旦であつた」の題のもと、

5) 第1歌集はというと、扉に「藻汐草第一叢書」「藻汐短歌会」と表示のある『藻の花』(編輯兼発行者大島療養所内藻汐短歌会代表者野島泰治、発行所大島療養所患者慰安会、1935年、定価50銭)となる。

処女なり白衣の折目清やかに年祝ぎ言も云ひ
て行きつる／(看護婦)

茶を入れて独りし籠る障子とに翳りまた照るとな
き冬の日ざしは

など93首もあった。島の療養所の短歌詠みであった小宮山を、『文芸民族』同人たちはどう知っていたのか。同誌の読者が小宮山をだれか知るには、情報量が少なかったはずだ。療養所外のどれほどのひとが歌集『白砂集』を手にしたか、それもわからない。

あとがき

本号「輯後閑筆」欄は4名による執筆。大崎澄谷は、「都村邸の二階を借りて編輯に当った」ことと、「次号はいよいよ一週年記念である。この記念を短篇小説特輯号として出すこととなつた。その規定は巻末を参照せられ一般の応募を祈る次第である」と記し、都村清敏はみづからを「描かない同人」どうもほんものになりさうだと自嘲気味の文章を寄せ、長田文雄は「新入りとして始めての同人諸兄との顔合せ」と自分の登場を描き、志邨節は創刊号同様に一つ書きで9つの項目を立て、その初めに「一、これで本誌も漸く四号を重ね、欠刊もなく円満に一ケ年を過ぎたわけである。ではもうこのへんで同人雑誌の常識に従ひ、廃刊すべきが賢明なのではないかと思ふ」との意思をあらわした。志邨はまた、掲載された稿にもふれているのだが、「創作も五篇を得た。この創作分の全枚数二八〇枚に達するものである。巧拙は別としてこの盛況はうれしいことに違ひない」と感想をのべただけで、個々の稿には言及していない。

志邨は一つ書き第6の項で、新加入の同人について紹介し、長田文夫は「東京外語校出身の海運

通訳官として永年世界中を歩いてゐた人」、松浦武は「満洲新京在の新人作家」とのこと。

紹介

この「輯後閑筆」欄の近辺にはいくつかの紹介欄があり、その1つが「寄贈誌紹介」で、そこにあがった5誌のうちの1つが「藻汐草(月刊)」で、それは「本県高松港外大島療養所発行 患者の作品を中心とする文芸雑誌／定価一部拾銭」と知らされていた。

『藻汐草』が療養所外の文芸民族社に送られ、藻汐短歌会の刊行物も『文芸民族』誌上で紹介され、大島療養所在住者の稿が同誌に掲載されていたのである。

もう1つの紹介が同人の「消息」欄にみえる。中河与一は、「厚生省労務調査管理委員囑託」で、この「八月中旬徳島県当局の招聘により来徳。同県並に岡山、大阪各地に講演」とのこと。和田邦坊は「山莊建築落成。八月より琴平町坂町に転任」、さきにみた苗村治一は「今回丸亀裁判所判事を辞し、大阪野村証券株式会社法律顧問として就任」、菅道雄は「今回東京大審院に転勤」。

なお、裏表紙見返しには、中河の著書『愛恋無限』(東京、第一書房、定価1円30銭)の広告が載る。「第一回透谷文学賞受賞作品」という同書は「東西朝日新聞が最初の白羽の矢を立てた問題の作「愛恋無限」は小説道の大道を往く題材の清新、潑刺たる人物の変化、新世代人の道德感などの縦横なる把握に依つて現代日本文壇に君臨するものは実に本書である。混沌たるこの社会にあつて人間は如何にその本来の生命を解放すべきか文明に蝕ばまれた純潔性を如何にして回復すべきかを指針して、遂に透谷文学賞を獲得した作品」と

いう。「第四刷六千部出来」、「四六版四九〇頁」の
図書。

同人列挙

奥付のつぎのページにやはり、同人の氏名があげられている。冒頭には、「奉頌・皇紀二千六百年」とあり、つぎに「文芸民族社同人(五十音順)」として、

亜里江光／大崎澄谷／久保井信夫／櫛橋芳子
／琴陵光重／小松潤／合田艶子／小谷芳春／
小山良夫／志邨節／塩田宏／菅道雄／高島通
夫／都村清敏／苗村治一／長尾樞夫／長田文
夫／真野拓／松浦武／碧優美子／水木千代
そして、「客員」4名——荒木暢夫、今井規清、中河
与一、和田邦坊の名がみえる。

最終ページ

本号第1巻第4号のページノンプルの最後は
160。そこには、「作品をつのる」の見出しで、「本誌
次号一週年記念号に発表の短篇小説をつのる」
との告知があり、もう1つ、「准同人規定」が載る
——「本誌は左の如く准同人を募り、内部の陣容
を強化することとなりました。一般の御加入を願ひ
ます／一、准同人は本誌誌友として毎号本誌の配
布を受く／一、准同人は原稿紙三枚以内にて本
誌朱欒林欄に作品を投稿し得、但その取捨は編
輯委員に一任のこと／一、准同人費は金一円五十
銭とし、一ケ年四回分を前納のこと」。

なおこのページの欄外下端に、「日本近代文学
館／山田正一氏旧蔵／(山田俊氏寄贈)」という
印影のスタンプが押されている。

同一語

さて、ふたたび荒木の稿をみよう。すでにふれた
とおり、この荒木は「北原白秋最高門下」と評価さ
れるほどの人物なのだが、それにしてはしかし、『白
描』に収められた作品にむきあうときの言葉が単
調にみえる。同情、努力、精進、の語がくりかえし
用いられているのだ(以下、下線は引用者による)。

「同情」×4——①「兎に角同情ある褒賞礼讃
の聲が多かつたやうである」(第2段落)や、②「歌
道精進に生命の余燼をつくさうとしてゐる者の沢
山あるといふことは、全く同情に堪へないこと」(第
4段落)、③「氏のこの努力に拍車をかけ、安んじて
精進せしめたものは、その周囲の限りない同情で
ある」(第8段落)、④「さもあらうとその気持にも充
分同情出来る」(第12段落)。

「努力」×5——①「実に尠からぬ努力を費され
てゐる」(第5段落)、②「幾年かをそのみに費した
といつてもいゝほどすさまじい努力を尽した」(第7
段落)、③前掲「容易ならぬ努力」、④前掲「氏のこ
の努力」、⑤「資質と勉強の努力が、短年月にこゝ
迄躍進せしめたこと」(第17段落)。

「精進」×4——①前掲「歌道精進」、②「人手
に頼つての精進は、考へてみても随分容易ならぬ
努力を要したこと」(第7段落)、③前掲「安んじて
精進」、④「氏に安慰を送り、鞭撻を与へ、療院に
安住して芸術道への精進に精根を尽さしめた」
(第8段落)。

同情、努力、精進の語が4回、5回とくりかえし用
いられ、しかもこれら3つすべて、あるいはそのうち
の2つが連続して使われている文があり、さらにこれ
らの語が頻出する箇所が稿の最初の2ページに
集中しているのである。荒木は読者にむかってま
ず、明石を同情されるにふさわしい人物と造形し、

また、彼への同情が努力と精進とを可能にした、彼は努力と精進のひとだ、と伝えているのである。

事実

もう一つ、6回も使われている語が目につく。それが「事実」である——①「その詠まれてゐる事実に驚愕の眼をみはり」(第2段落)、②「小川正子氏の「小島の春」を読んでみても、その文章より先に、記述されてゐる事実に驚^[ママ]の眼をみはり」(第13段落)、③「着色も扮飾もなく書かれてゐる事実に、僕は圧倒されて了ふ」(同前)、④「さうして之は決して寓話でも昔噺でもない、現然の事実であり」(同前)、⑤「これ以上の痛ましい事実がなほなほ夥しく隠れてゐる」(同前)、⑥「この惨澹たる事実が、力強く僕らを打ちのめす」(同前)、とそのうち第13段落において5回と頻繁に用いられ、また、「実在」(「実は僕らの住む同じ地上の白日の下に真に実在する生々しい悲哀」第13段落)と、「現実」(「白描」の一卷は、明石海人氏を主人公とする現実の記録」第14段落)の2語をくわえると、「実在」する「現実」や「事実」こそが、筆者の荒木に稿を書かせているようにみえてしまうのである。では、その「事実」とはなにか。

それは、「これ以上の痛ましい事実」「この惨澹たる事実」と形容される「生々しい惨状」である。筆者荒木は、「氏のことには全く何にも知らない僕」という。では、それをどうやって知ったのかというと、それはあくまで「詠まれてゐる事実」なのであって、明石の詠んだ短歌を読むことで荒木が「驚愕の眼をみはり、しばしば戦慄を覚えざるを得なかつた」というその「事実」なのである。

惨状

では荒木は、それをどういいあらわしたか——
糜爛する肉体に脳^[ママ]み、治癒の見込よりも、抜け出せない業病の深みへ墮ち行く煩悶の足搔にあつて、心魂を尽しての成作であつて見れば、歌壇のみならずあまねく一般世間からの賞讃の声は、なほいくらあつてもいゝのぢやないかといふ気がする。〔第3段落全文〕

と描写される、「糜爛する肉体に脳み、治癒の見込よりも、抜け出せない業病の深みへ墮ち行く煩悶の足搔」が、その「生々しい惨状」なのだ。

筆者が観取した「心魂を尽しての成作」とは、すでにみた、本人の「努力」と「精進」と、また周囲の人びとの「同情」とのいわば結晶である。その「成作」のようすがまた、筆者荒木によって表現される——

苦難のどん底に陥り、懊悩煩悶の極に喘ぎ、辛酸を嘗め尽しては、呪詛の途もなく、慟哭の対象も失つては、却つて真の諦念に一縷の光明を得たものであらう。尠くとも信仰的などでもいふか、心の余裕が出来なければ、歌などといふものは作れないのではないかとおもふ。七転八倒の真最中、苦悩煩悶の血まみれのまゝでは、眼も見えねば、耳も聴えないといふのが本当であらう。〔第10段落全文〕

と、筆者は明石の「体験」(第17段落)を推しはかる。それは「悲痛な体験」(第19段落)にほかならない。さきにみたとおりの、「氏のことには全く何にも知らない僕」という荒木なのだが、彼は『白描』を読み、明石の「体験」を追つたのだ。くりかえせば、「僕らを泣かしめ、喜ばしめ、驚かしめる」『白描』の一卷は、明石海人氏を主人公とする現実の記録なのである。

成 作

荒木は、「事変」下を「短歌隆盛の時代」ともとらえ、そうした時局ゆえにまた、

これ程の苦患懊悩を身に受けては、消すに消されぬ骨肉に喰ひ入つたものであるのだから、顧みるの余裕さへ出来れば、表現技法の整ふと共に、たちまちほとぼり出て作品となつたといふ感がせらるるのである。而も氏は、その推敲にも、不自由を堪へ、人手を借りて、随分神経を尖らし懸命であつたといふ。さもあらうとその気持ちにも充分同情出来るやうにおもふ。〔第12段落全文〕

と明石が短歌を詠むそのようすを説いてみせるのだった。明石の「推敲」についてはまたべつに記されていて、「言葉の端々にまで周到の注意が払はれてゐる。文字の一字一語にも気むずかしい選択が行はれるので筆耕の役をつとめるものが堪へ切れなかつたという話を聞いたが、まことにさうだらうと想はれる」というぐあいだ。自分の歌をみずから記録できない明石は、筆耕役の病友泣かせだったという。

荒木は、「七転八倒の真最中、苦惱煩悶の血まみれのまゝでは、眼も見えねば、耳も聴えないといふのが本当であらう」と推しはかり、「尠くとも信仰的などでもいふか、心の余裕が出来」たればこそという明石の作詠はまた、「その周囲の限りない同情」があつて初めて可能となつたのだという。

ではそうして詠まれたとみた短歌をどう評するか。

評 価

たとえば、「杖」と題された短歌4首がまず転載される——「事ともなく行き来なしけるこの道も杖の先には捜りわづらふ／捜り行く路は空地にひら

けたりこのひろがりの杖にあまるも／泥濘^{ぬかるみ}に吸はれし沓^{くつ}をかきさぐる盲^{めしひ}にこそはなり果てにけれ／杖さきにかかぐりあゆむ我姿見すまじきかも母にも妻にも」。これらへの評がつぎのとおり。

この一聯は集中でも傑作のうちに入るものとおもふが、視覚が失はれて聴覚が敏感になり、肢体のはしばしから失はれてゆく感覚をおもへば、さぞかし心もとないことであらう。失はれた部分は失はれた部分として、一部敏感に働くものであらうか。失はれてゆく感覚は、失はれる前に仄くものがあらうか。失はれたるが故に憧憬一段と深く、感覚への回想を新鮮に甦生せしめ得るでもあらうか。悲痛な体験をよく整理し巧みに表現してゐる。

——当事者の感覚に思いをよせながら、「悲痛な体験をよく整理し巧みに表現してゐる」と想をまともてている。

つづけて2首が転載——「杖立てて佇みをればしたしさよ誰彼の声の言ひかけて行く／声かけて傍へを過ぐる足音の一人一人をおもかげに繰る」⁶⁾。

これらについてはさきに参照した、「言葉の端々にまで周到の注意が払はれてゐる」云々の文章が寄せられている。

つぎの転載は——

癩の兆候は麻痺なり。四肢のさきよりひろがる知覚麻痺に、針にて刺すも火にて焼くも更に痛みを覚えず。次第に募れば全身の皮膚粘膜を犯し、遂には、舌、咽喉、眼球にも及ぶ。癩の最後の状も亦麻痺なり。／朝醒めて指に見つけし火ぶくれの大きからぬは憎からなく^{かさぶた}に／癩の剥がれしあとに具はりて指紋^{あや}文なすこのいみじさを／朝明をもよほす悪寒にたづぬれば人差指に爪ぞ失せたる／いつしかも脱失^{ぬけう}せてける生爪^なに嘗

6) 原著にもう3つある短歌「さぐり行く裏山路の暁^{あけ}の空晴れたるらしもさへづりの澄む」[路べりに杖を立てつつ朝まだき入江にはやき爆音を趁ふ]「ひとしきり葦生をわたる朝あらし眼を睜りつゝ聴きとめにけり」は転載されていない。本稿での『白描』は村井紀編『明石海人歌集』(岩波書店、2012年)を参照した。

むればやさし指の円みは／☆／耳の孔さぐらるるときともしくもここに残りて痛覚はあり／しろがねの針をたつればしかすがに眼の球に潜む痛みは厳し

がある⁷⁾。これらについては、

前書が長過ぎるといふ評を療院の中から聴くが僕らから見ればその長い前書もあまり邪魔に感ずることなくして読んだ。それは癩の世界に縁遠く住んで、その方面の認識の乏しいが為めでもあらうが、序文をみても巻末記をみても簡潔によく書けてゐるとおもふ。これら前書を抜く時は却つて作者は説明の不足を感じ、説明的解説的の短歌を補足し度くなつて来るのではなからうか。それよりも前書がないと解しかねるといふ歌、独立性の乏しい歌、或は一首に抜きはなしては興味索然たる歌がないであらうか。斯うした歌が『白描』の中にもあるといふことは否めない。歌集としては許さるべきか、思ひ切つて抹殺すべきか議論のあるところだらう。

とのべたうえで、「説明的解説的」「独立性の乏しい」「一首に抜きはなしては興味索然」という批評がさらに展開される。

「またさらに老いましにけむ夢みしは別れ来し日の面影なりき」の1首をとりあげて⁸⁾、「父といふことは前の歌を見て来ねばわかるまい」と記される。たしかに原著ではこの1首のまえにある3首にはすべて「父」の語があり、その死をうたっていた。転載されたもう1首「うすら日の坂の上にも見送れば靴の白きが遠ざかりゆく」を参照させて、「前後の作品から見て兄が面会に来てのかへりを作者が惜しんでゐるのであるが、一首切り離して見ると一聯の中に置くほどに引きたゝなくなる」と評していた。

くわえて、「待てる家妻に言ふべかるあまちはあれど一言にわが癩を告ぐ／妻は母に母は父に言ふわが病襖へだててその声を聞く」の箇所には、「詞書がある故にあはれが深い。殊に癩であるがゆゑにこそである」と記し、また、「七宝の太花がめのあをき肌夕かげりくるしづけさを冷ゆ」には、「斯うした身にかゝはりのない歌が数多くはないとおもふが、処々に適当に配置されて、この歌集の複雑性を増し、息づまる空気を緩和してゐる」とのべる。そのつぎにおかれた3首「切割くや気管に肺に吹入りて大気の冷えは香料のごとし／このままにただねむりたし呼吸管いで入る息に足らふ命は／また更に生きつがむとす^{めしひ}盲我くずれし喉を今日は穿ちて」については、ただ転載しただけで短歌への言及はない。

落着

荒木による『白描』中の「佳作」「よき歌」とは、ひとえに「癩であるがゆゑにこそ」の評価なのであり、彼にとっては、当事者ではあれその「身にかゝはりのない歌が数多くはないとおもふが」、それらが「処々に適当に配置されて、この歌集の複雑性を増し、息づまる空気を緩和してゐる」のであって、それもまた一興、「悲痛な体験をよく整理し巧に表現してゐる」ところが『白描』の心髄ということとなる。『白描』の短歌を讀めるためには、その著者の体験が「悲痛」でなくてはならないのである。

すでにみてきたところをふりかえれば、その「悲痛」さが「事実」であり、「白描」の一卷は、明石海人氏を主人公とする現実の記録であり、それが「僕らを泣かしめ、喜ばしめ、驚かしめるのである」、その「事実」に、僕らは圧倒されて了ふのである」ということだ。そうした現実の「体験が冗談にも誰もが

7) ここでは「麻痺」と原著にある見出しが転載されていない。また詞書の「癩の最後の状も」は原著では「癩の最後の症状も」。記号の☆は原著では×。原著にある1首「指より肘にひろがる火ぶくれの己がこの手ぞゆゆしかりける」が転載されていない。

8) 原著では「またさらに老いたまひけむ夢見しは別れ来し日の面影なりき」。

味へるものではない」のであるから、なおのこと、いっそう、明石海人はその「資質と勉強の努力」とによって、あわせて「その周囲の限らない同情」によって、くりかえせば「明石海人氏を主人公とする現実の記録」が成ったのである。「氏のことに就いては全く何にも知らない僕」と明かす荒木は、おもに『白描』をとおして著者が「体験」した「事実」を知ったのだった。

その死にさいして、「『白描』の作者を惜しむ」荒木は、『白描』の「佳作」「よき歌」を褒め、その作者の「努力」「精進」とそれを支える「同情」とを讃え、それとともに、「その詠まれてゐる事実^マに驚愕の眼をみはり、しばしば戦慄を覚えざるを得なかつたのである」と記した。「糜爛する肉体に脳」むこと、「治癒の見込よりも、抜け出せない業病の深みへ墮ち行く煩悶の足搔」のなかでの「心魂を尽しての成作」、「苦難のどん底に陥り、懊悩煩悶の極に喘ぎ、辛酸を嘗め尽しては、呪詛の途もなく、慟哭の対象も失つて」もなお、「真の諦念に一縷の光明を得た」ようす、これらが荒木を驚かせ、戦慄させ、また感動をさせたのみならず記したのだった。

反駁

荒木は『白描』になにをみたのだろう。たとえば、「尾山篤二郎氏などは「第二部『翳』の諸篇の如きは無用の長物である。」と喝破してゐる。しかしながらその無用の長物の第二部『翳』に於ても、氏の資質は充分窺はれ、その将来を囑望することが出来る」と、『白描』のなかの「第二部 翳」についての、すでにあった評をとりあげ、それに反駁している。そして明石自身による、「作者の言葉」として『白描』に載せられた――

第一部白描は癡者としての生活感情を有りの儘に歌つたものである。けれども私の歌心はまだ何か物足りないものを感じてゐた。あらゆる仮装をかなぐり捨て、赤裸々な自我を思ひの儘に跳躍させたい、かういふ気持から生れたものが第二部翳で、……………仔細に見れば此処にも現実の生活の翳が射してゐることは否むべくもない。この二つの行き方は所詮一に帰すべきものなのであらうが、私の未熟さはまだ其処に至つてゐない。

を転載したうえで、「と氏自身も書いてある様に、完成されきつたものでなく、僕ら大いに今後の作品を期待したものであつたが今は空しいものとなつて了つた。若し永らへたらばどうなるだらうかなどと想像したところで、なかなか判断はゆるされる問題ではない」と記している。

荒木は『白描』の作者自身による「作者の言葉」を、未完成であることの自覚をあらわした文章として引用しているのだが、明石はむしろ同書「第二部 翳」は、「現実の生活の翳」、「あらゆる仮装をかなぐり捨て、赤裸々な自我を思ひの儘に跳躍させ」るもの、「第一部白描は癡者としての生活感情を有りの儘に歌つたもの」と、これら「二つの行き方は所詮一に帰すべきものなのであらうが、私の未熟さはまだ其処に至つてゐない」というかぎりでの、いいかえると、第1部と第2部とを合一できなかった「未熟さ」なのだとうたへていると、わたしにはみえる。

第二部

では、『白描』の「第二部 翳」にはどういった歌があるのか。『白描』所収の短歌としてしばしばとりあげられる1首である⁹⁾、「第二部 翳」全154首のう

9) 山下多恵子『海の歎―明石海人と島比呂志 ハンセン病文学の系譜』（未知谷、2003年）などを参照。この1首はまた明石の「郷里沼津千本松原の歌碑」に刻まれている（村井紀「〔解説〕明石海人の“闘争”」前掲村井編『明石海人歌集』所収）。

ち第59の短歌「シルレア紀の地層は杳きそのかみ
を海の蠍の我も棲みけむ」を、荒木はどう読むの
だろうか。

ほかにもこの第二部には、「涯もなき青空をおほ
ふはてもなき闇がりを彫りて星々の棲む」(第13)、
「星の座を指にかざせばそこに散らばれる譜の
みな鳴り交す」(第38)、「引力にゆがむ光の理論な
ど真赤なうそなる地の上に住める」(第62)、「こん
なとき気がふれるのか蒼き空の鳴をひそめし真昼
間の底」(第76)、「夜をこめてかつ萌えさかる野の
上にいちめんの星はじてて飛びぬ」(第149)とい
った短歌がある。

こうした一読したところ「身にかゝはりのない歌」
が、「処々に適当に配置されて、この歌集の複雑性
を増し、息づまる空気を緩和してゐる」といい得る
のか。たしかにこれらの短歌どもが、『白描』の「複
雑性を増し」ているといえるだろうが、だからとい
って、「息づまる空気を緩和してゐる」とは的確な読
み方なのか。むしろわたしには、鋭い緊張を読むも
のにあたえている歌だと感じる。

またこれらの短歌を、未完成だの未熟だのと評
する資格が、だれになればあるのかという問いを評
者荒木は自覚しているのだろうか。またまた、第1
歌集だからこれは作詠の途上なのだといつかた
づけるのではなく、「巧み」との高評価をあたえるに
しても、ではこれらの歌が「悲痛な体験をよく整理
し巧みに表現してゐる」と評することが適切なのだ
ろうか。

ここにあげた短歌はわずかな数ではあれ、むし
ろ歌集に息づまる空気を注入しているのではない
か。こうした緊張をとおして、明石自身がいうところ
の「現実の生活の翳」や、「あらゆる仮装をかなぐ
り捨て、赤裸々な自我を思ひの儘に跳躍させ」る

ことが『白描』の「第二部 翳」に投影されているの
ではないか。

【附記】

本稿は2015年度日本学術振興会科学研究費
助成事業基盤研究C「20世紀日本の感染症管理
と生をめぐる文化研究」(JSPS科研費26370788、
研究代表者石居人也)、2015年度滋賀大学経済
学部学術後援基金研究テーマ「歴史資料の保存
と公開と活用の実践論」、2015年度滋賀大学環
境総合研究センタープロジェクト研究「療養所環
境を交ぜる」の成果の1つである。